

反帝戦線

NO 10

社会主義学生同盟

全日委員会 4/6

機関紙

68

4/26日 反戦ストへ米ロリヤンタゴン、日本リ防行庁へ斗争を大衆的に斗い抜き、4/28首相官邸実力斗争に全日から総結集せよ。

ロソいのスローガン

▽帝ロ主義の侵略と反帝帝に反対するベトナム革命—米ロ黒人反乱と結合し、日本帝ロ主義打倒の革命的な斗争を展開せよ。

▽日本帝ロ主義の破壊—反帝—リアジア侵略の前進を阻止せよ。

▽日本帝ロ主義のアジア侵略阻止—農民抑圧の成田空軍基地阻止。

▽4/26—28革命的反戦斗争の爆発で、全日連—反戦を、ロレタリア敵—戦線として強化し、8/6日 反戦集を、カチとせよ。

ベトナム革命の進行は、米帝ロ主義の世評を、侵略と反革命を、かつ、黒人反乱として米帝ロ主義に、革命的な連続性を結集せよ。

日本帝ロ主義の古風分割—アジア侵略と革命の全面化の過程も、またベトナム—後進国革命と結合した反戦斗争の高揚、日帝侵略斗争の爆発を形成し、7/15日 反戦斗争を、革命と反革命の激突の過程として登壇せよ。

帝ロ主義の不均等発展—古風分割—侵略と反革命の全面化が、後進国永続革命と、日帝侵略の古風革命の根拠地回撃への転化を形成し、そのことが帝ロ主義の頭部の階級斗争の爆発—革命的立場を形成している。そして、後進国、帝ロ主義の侵略と反革命に反対する帝ロ主義の階級斗争に引きつけられ、そこに於ける帝ロ主義打倒と、ロレタリア独裁の樹立と、それを直ちに後進国永続革命の勝利、先鋒者回撃に於けるスターリン主義打倒といふ古風階級革命の現象性の形成として、このためならぬことではない。

この反戦斗争の年代に於ける日本帝ロ主義の反戦斗争、ナショナリズムの指図—帝ロ主義軍隊の確立—帝ロ主義的國家体制の確立として登壇せよとされている。

革命は、ロレタリア独裁主義に立脚し、革命的な斗争として階級階級階級を結合した、ロレタリア権力斗争として登壇せよとされている。

訪ベトナム—日 反戦スト—訪米—エンズラ斗争へ、継続して反戦斗争の高揚は、ロレタリア国際主義の内幕の形成と、ロレタリア権力斗争の発展として総括せよとされている。

この条件の成熟は、昨秋の度、佐藤首相の東南アジア太平洋諸国訪問、訪ベトナム—訪米—エンズラ斗争、今、年のスバルト、カンジ—米日に表現される日本帝ロ主義のアジア侵略と革命の本格化によって促進された。日本帝ロ主義のアジア太平洋地域への勢力圏拡大は、革命と反戦の後退のあとを、脅かすものである。

このこと、それを保障するベトナム—後進国革命—日 反戦の反革命軍事力の強化、アジア太平洋地域南米同盟会議の軍事権強化を、後進国マルティニクスから要求され、日本帝ロ主義の死活的問題として、軍事力強化が登壇している。それへの対応は、仏—英帝ロ主義の後退によって空気が、SEA-TO (ベトナム)、日本を保護するアジア革命同盟の中心とし、その中で、軍事力を強化し、ハゲモニーを拡大すること、東南アジア同盟の同盟構想—沖縄基地掌握—自衛隊の帝ロ主義軍隊化として始まっている。

この訪ベトナム斗争は、日本帝ロ主義のベトナム反革命斗争への本格的な介入に対し、ベトナム革命と結合した、総括された斗争による反戦斗争の展開が、ロレタリア国際主義の内幕を形成するに必要不可欠だ。

ベトナム革命日、自回マルティニクス—打倒—米帝ロ

主義軍隊打倒→米帝国主義打倒の必然性による）、右翼的の反戦言説、米帝国主義打倒には、帝国主義軍隊解体の無い、右翼支配の破壊による暴民反乱を形成し、右翼同盟革命の現実性をつくり出している。

前バト阻止斗争に於て、日本の反戦斗争は、日本帝
国主義が暴力で帝国主義軍隊による支配を、後進国一
国を通じて非協同的行動することを見出し、この支配
を克服する方向が、暴力で暴力にあることを非協同的
行動とし、現下、同盟の無いを實現してバトナム
革命との結合によるロレタリア回教主義の母実の形成を
開始したのである。

このロレタリア回教主義の、自回教主義の
侵略的行動下、帝国主義軍隊解体（米帝）の拒否、回
教主義（米）を拒否している米回教主義との結合を媒介
として、ロレタリア回教主義を、自回教主義の侵略
的と反革命の精神と自回教主義打倒として深化した
ものに於ける。オニの意気は、回教者（右）の軍事物資輸
送拒否斗争とそれを拒否した全回教的右翼者階級の大
衆的示威として、右翼系、街頭を結合した右翼者階級
の暴力斗争の萌芽が、ロレタリア回教主義の深化に
よって形成されたことである。

かかるロレタリア回教主義と、ロレタリア権力斗
争の深化は、訪米阻止斗争に於て、既に暴力斗争部隊
として社会主義主義的統一戦線から分離していた全回
教一対に反戦を、明確に、日本帝国内部で、ロレ
タリア回教をめぐって、ロレタリア統一戦線として登壇
させたことである。

エンボラ斗争を阻止斗争の最大の意義は、このロレ
タリア統一戦線の運動が、政治打倒→マルジョマ権力
打倒→プロレタリア回教の展開の下に計画された戦術
として展開されたことである。それ以前、日本帝国内部
のアメリカ侵略と革命の強化への不安定な関係と日本帝国内
部主義打倒のロレタリア回教主義を、エンボラ斗争を阻止
し、右翼同盟打倒の戦術を通じて表現した。そして、
ロレタリア統一戦線の運動形態を、現下、首都を離
れ、暴力斗争、それを支える全回教として、生産力一
街を結合した大衆的示威斗争の方向性の下に提議し、
その組織形態の発展を、更に反戦→工場反戦→スト

斗争言説として展開した。これを媒介すべき、党の理
由、地区党→産別委員会として設けられた。

このロレタリア回教主義の深化と、ロレタリア権
力斗争の発展こそ、エンボラ斗争戦術（米）に至る
「反戦斗争の自然発生的高揚を促す」ことである。

③この反戦斗争は、反革命、反米を基本的な質とし、
この高揚は、民社、公明、社会、共産に至る状況は
反政府戦線を形成している。

これは、日本帝国内部で、その右翼打倒を、バトナ
ム→後進回教革命→中回教に対する日本反革命同盟の強化
と、その中に於ける沖縄軍と軍権、自衛隊の帝国内部軍
化を基礎とした「米」拡大として、アメリカ侵略反
革命として、右翼系、右翼系、右翼系、右翼系、右翼系
する「米」への大衆的攻撃である。

だが、日本帝国内部の危機とは、この反政府戦線の
を面して自体内にあるのではない。その危機は、経済
的勢力圏の拡大→米帝、シヨナリズムから、その政
治的軍事の軍権→政治的軍事同盟「シヨナリズム」への
運動的発展で、その中への民間大企業勢力者→同盟一
民社への入、日和見主義の社会排他主義への転化の一
時的坐打である。

この危機は、日本帝国内部の危機を、根本的には、バ
トナム→後進回教革命→中回教への反革命を通じて、中回
教の拡大権を行使するのではないこと、そして、直接的には
この回教革命を基礎とする米帝国内部との同盟として、か
敷くべきことである。

従って、日本帝国内部の危機の打倒→回教は、この
回教同盟同盟への入、米帝の拡大→米帝自主性として
開始されている。そのことの意味が、自主防衛（帝
国内部主義軍隊の確立）→沖縄回教（アメリカ侵略と革命の
前線基地の軍権）である。

この、前バトナム→回教反戦→米→エンボ
ラ斗争の中で形成された「米」右翼同盟革命の現実性、
それによる「反戦斗争の自然発生的高揚」を通じて、回教
主義同盟を媒介とした「シヨナリズム」の露上と、反革
命の全面化と、両方両面的なものである。この「米」
保く「米」右翼斗争の展開であり、かつ右翼的のもの
である。従って、現下展開された「米」右翼斗争

かくて、米帝主義は、後進国への侵略及革命と、国内階級斗争の革命が及革命の天賦という過程に入りつつある。

(8)日本帝国主义は、その経済的勢力圏を極東から、東南アジア太平洋地域へ拡大し、その垂直結合を保障する資本輸出体制を資本自由化に米民間長期資本の輸入に外貨所得として確立しつつある。そして、垂直結合とは中小企業、軽工業、農産、漁業の後進国への輸出と国内、打道の重化学工業化によるこの後進国との結合である。この重化学工業化は、資本自由化に米資本との競争に対応する銀行と産業の結合に金融力預制支配の確立過程として進行する。この金融力預制支配の確立を支える重化学工業化は、社会資本の充実に社会開発、運輸、交通、通信部門の合理化、再編、組み込みを同時に進める。このことが日本資本主義の社会的再編の基礎である。

この全社会的再編は、帝主義的國家体制へ統合されつつしている。この統合を媒介する統治原理は共同体理想が、日本資本主義の外的膨張にナショナリズムとして登場する。このナショナリズムの下に、日本資本主義の外的膨張の中心たる重化学工業部門に民間大企業労働者、同盟、民社を吸引し、この政治的包囲の中で、運輸、通信、交通部門、公務員労働者への合理化、労働運動の基幹部隊たる総評、社会党、共産党の解体と変質を實現し、中小軽工業、農業、漁業の整理、後進国への輸出と依拠労働力の創出に都市下層民の形成が行はれる。

この日本資本主義の外的膨張が、現更には、後進国永続革命に中込への反革命と米帝主義のアジア勢力圏の再分割として進み、かつ、独力で、この反革命を貫徹しえびい弱さが存在する。このことから、日米反革命同盟の強化と、その中に於て自衛隊の帝主義軍隊化と沖縄基地の堂座を通じへゲモノーを拡大し米帝主義の勢力圏を再分割を行なうという世界戦略にアジア侵略及革命が登場する。

二に於いて自衛隊の帝主義軍隊化は、後進国革命への海外派兵、中込への核武装、国内階級斗争への治安出動、国民総動員機構としての徴兵制の4点にわた

る日本資本主義の対内的に對外的諸關係のマルチメディア的総括がナショナリズムと帝主義國家体制の中心として登場する。かつ日本及革命問題についての日本帝国主义の介入は、アジアをめぐぐる勢力圏分割戦の上に、沖縄基地の掌握と核武装の問題として登場してくる。それらは、日米両帝主義の力関係に於いて、沖縄核基地付還、日本帝国主义の沖縄基地掌握と核武装化への布石として登場するものとして、(9)だが、日本帝国主义の下に於いては、侵略反革命に對する帝主義軍隊を中心とする帝主義的國家体制の確立も、米帝主義と同様、50年安保と70年代階級斗争に於ける革命と反革命の決戦をたすものである。従ってこの反革命と革命の決戦の性格が向われてくるのである。革命の波は反戦斗争と経済斗争の自然発生的高揚とその結合として始まっている。

現在世界の基本構造は、帝主義の不均等発展(内的膨張)外的膨張、経済的対立一政治的対立一労働者國家一国内階級斗争への対応を媒介する帝主義国内部の階級關係の再編を通じて貫徹するものにある。日本帝国主义の外的膨張は、ミトナム一後進国永続革命と中込の世界革命根拠地國家への転化、及び、アフリカ一勢力圏の維持に死地をかける優勢な米帝主義の壁に突き当たり、相対的地位な日米反革命同盟の強化として、まぎれの政治的軍事の性格を表わす。このことにより、日本帝国主义の世界分割にナショナリズムの形成過程は、経済的勢力圏に経済ナショナリズムからその政治的軍事的掌握に政治的軍事的ナショナリズムへの発展が、国内反革命の勝利を媒介としてのみ最終的に可能となるのである。この国際的の遂行過程は、ベトナム一後進国永続革命と中込の世界革命の根拠地國家への転化によるその増幅という巨大な壁が立ちふさがり、かつ相対的地位な日米反革命同盟の付け加わることにより、不断にナショナリズムの崩解過程を開始する。従って、日本帝国主义のアジア侵略及革命は、世界革命の永続性と結合した、反反革命と反米を旨とする反戦斗争の高揚を同時にもたすものである。

この反戦斗争は、社会的再編の過程に引き入れら

つのである諸階級諸階級の経済斗争を拡大し、結合する。
二)の経済斗争の高揚は、公労被労働者の反合理化斗争、中小企業労働者、農民、漁民の没落、低廉労働力化、都市下層民化への抵抗として開始される。さらに反戦斗争は、後進革命、中国の外部的力と結合して日本資本主義の外的膨張を危機に陥れ、このナショナリズムの物質的基礎の动摇は、これに吸引されつつある民間大企業労働者の経済斗争の高揚をもたらし、このナショナリズムの反戦斗争は、日本資本主義の内的膨張から外的膨張への発展が、ついに侵略反革命として必然化する。この過程は、諸階級の個別特殊利害に経済斗争を結合し、広汎な帝国主義への反対派を形成する。
三)のことは社会的再編、帝国主義軍隊という対内的総括の上に、対外膨張を展望する日本帝国主義の根本的危機である。この対外膨張の危機は遂に、ナショナリズムを破壊し対内的総括の危機をより激化するのである。

(10)この日本帝国主義の危機は、同時に、労働者階級の危機である。

独占—金融力頭脳が、経済的政治的全生活を支配する帝国主義段階に於ては、全有産階級（労働者階級も含めて）が、帝国主義の側に移行する。しかし、帝国主義の他民族抑圧と国内反動は、同時に、小ブル民主主義的の帝国主義への反対派を形成する。反戦斗争と経済斗争のこの高揚と結合こそ、小ブル民主主義の危機である。

だが、小ブル民主主義の望みは、プロレタリアートと結合し得ない限り、ただ可望非望のである。何故ならば、帝国主義の批判の根本的問題は、政治に於る民主主義は、経済に於る独占を粉砕し得ない限りありえないといふことであり、プロレタリア独裁のみがこれを解決するからである。

現代の小ブル民主主義たる反戦斗争は、後進革命と革命との結合、反反革命というプロレタリア国際主義の萌芽を、対米関係に於る日本の自主性、ナショナリズムとして表現する。

ナショナリズムとは、独占—金融力頭脳が全社会の

の経済的政治的全生活を支配することのイデオロギック的表現である。従って、日本帝国主義の危機が全面化する過程は、同時に、ナショナリズムに於て自からを表現したこの自主性危機の危機、急速な分解をもたらすのである。

二)の局面こそ、反革命の開始される局面である。それは、米帝国主義に対する自主性を基軸とする政治的軍事のナショナリズムの本格的開始であり、帝国主義軍隊の登場によるアジア反革命侵略と国内の反戦斗争—経済斗争への暴力的弾圧の開始である。この局面は、反戦斗争の分解の進行、この反戦斗争によって日本帝国主義に對して統一されてきた階級諸階級の個別特殊利害に経済斗争の分解と対立の開始である。そして危機の集中した小ブル、ルンパフが、日本帝国主義の志兵として、全面的に対外膨張を要求し帝国主義軍隊に組織され、労働者階級への反革命を開始する上からのファシズムが進行するのである。

従って、この革命と反革命の局面、追い込められた日本帝国主義が、政治的軍事的ナショナリズムと帝国主義軍隊の暴力として登場するこの局面を支配し、それを革命へ転化する。この未来からの「計画された戦術」が必要なのである。

< 五 >

帝国主義の世界分割の全面化は、プロレタリア独裁と世界革命の前提である。としてこの世界革命の現実性は、労働運動の国際的なるプロレタリア国際主義と社会排外主義への分裂であり、小ブル民主主義と（二）の分裂を内包しているのである。この把握の上にて、プロレタリア国際主義への分裂を、帝国主義戦争を内乱への政治路線とオーストリアの組織路線として推進した。

現代帝国主義の危機は、小ブル民主主義の社会排外主義への分裂は、小ブル民主主義の紛糾、ファシズムを形成させることにある。

小ブル民主主義をプロレタリア国際主義への分裂とプロレタリア独裁と世界革命を實現すべき計画としての戦術の核心は、プロレタリア国際主義の内裏の形成、プロレタリア権力斗争の運動組織形態

それを媒介する等の型 戦術形態である。

(1) イトナムー後進国永続革命と、キューバ、北アメリカ、中国の世界革命への根拠地国家への転化の進行と、日本西帝ロイムの世界分割戦と後進国侵略反革命の強化等、日本西帝ロイム内部に革命と反革命の決戦を準備している。

日本帝ロイムの反革命は、日本国際反革命同盟内部に於ける対米自主性日本帝ロイムへの政治的軍事的対決の政治的軍事的ナショナルリズムとして、アジアをめぐって日本帝ロイムの戦争として存続の時代に登場する。従ってかかる時代のナショナルリズムに對決して、ロータリー国際主義の内実とは、既に中国の世界革命の根拠地国家への転化に支えられたイトナムー後進国永続革命との結合を媒介として、形成されつつある萌芽を發展させたものである。その發展の方向は、日本西帝ロイムの世界分割と政治的軍事的対立に對し、日本帝ロイムとの結合を媒介した、「日本帝ロイムへのアジア侵略反革命粉砕と日本帝ロイム打倒」である。

70年代後半が実現するべきロータリー国際主義とはそのまじなものである。それは70年代階級斗争に於いて、中国、北アメリカ、キューバ等の労働者国家ロータリー・中南米の後進国、日本西帝ロイムへの労働者階級に世界同時革命の遂行性を与えるのである。

次にこのロータリー国際主義の内実の形成過程は同時に、ロータリー権力斗争の運動組織形態の発展として結晶化してはなつた。

60年代後半以降、日蘇条約以降の経済ナショナルリズムへの労働者階級の敗北は、生産力へのヘゲモニーの喪失、政治斗争の解体の結果した。

斗争の下に諸階級諸階級の個別な斗争を統合し、かつこの政治斗争の中で形成される生産者へのゲモノを政治ゲモノへ組織する差別意識への展望をたくり出すべくてはならぬ。

党の戦斗組織とは、革命的な戦斗の實力斗争としての展開の中軸を担い、而して主義軍隊の解体→全人民の武装→赤軍への展望の中で、赤軍の中心と見らるべくてはならぬ。

□内部は、反戦インターの指導であり、その政治的斗争を通じて、自から世界同時革命を實現する世界党へ向けてはならぬ。そこに於ける資本斗争の十一口、ベトナム→後進国永続性をどれが形成した先進国革命の派に引き継ぎ、その先進国革命を通じて世界同時革命の實現を展望し、この後進国周辺の革命派の批判がある。

カカる党の中心的運動の指導を行つ中央政治局は、その活動を全政治新聞を通じて表現する。

問題とするべきは、党の戦斗組織としての社会学の活動である。その任務は、学生運動の先鋒性の中軸と見られ、プロレタリア国際主義→革命的な戦斗→生産者と街頭を結合した戦斗と見られ、現局面におけるプロレタリア戦斗の最急論が、帝国主義の暴力支配を暴かすことである。このことにより、プロレタリア戦斗の発展、地区反戦と労働者階級の政治斗争の強化を實現することである。そして、このプロレタリア戦斗との結合をくしては、革命と反革命の激突の時代には、帝国主義と対峙する層としての学生大衆斗争は形成し得ないからである。

次に、社会党、共産党への資本斗争の基礎を確立し、これをくむべきである。

帝国主義根底的批判は、プロレタリア独裁であり、これへ至る展望の如何が問われる。

(13) 我々は、日本帝国主義の世界分割制のアジア侵略反革命が、日本反革命同盟の強化とその中に於けるゲモノの拡大として進行し、同時に、ベトナム→後進国永続革命、中国の世界革命の根拠地国家への取化による国内階級関係の再編、革命と反革命の激突過

程としてあり、反革命は、日米両帝国主義同対立を基軸とするナショナリズム帝国主義軍隊として登場することを見出した。そして、革命はプロレタリア独裁への「計画としての戦術」をその如く展望した。それらは、「日本帝国主義のアジア侵略反革命の強化は70年史、米粉砕→日本帝国主義打倒」のプロレタリア国際主義、生産者→街頭を結合した全政治的實力斗争という運動組織形態、「自行隊の帝国主義軍隊化粉砕→全人民の武装→赤軍」という戦術形態である。

従って、社会党、共産党への資本斗争の基礎を、プロレタリア国際主義、運動組織形態、戦術形態の三要素である。

社会党、帝国主義の不平等発展→革命的対立→政治的対立と否定し、日米反革命同盟内なる日本帝国主義のゲモノ→拡大を見ず、ベトナム→後進国永続革命との結合を、安全保障→反米民族主義へ歪曲し、米日反戦斗争との結合を媒介として日本帝国主義を形成し得ないからである。

このプロレタリア国際主義の改良は、ナショナリズムからの労働者階級の解放、生産者へのゲモノの奪取を不可能とし、その運動組織形態を、街頭に於ける政治斗争としてしか表現し得ないからである。

そして、社会党、帝国主義軍隊が、新たな政治(ナショナリズム)と国家権力の中核として登場しつつあることを見ず、戦術形態を政权構想に議会主義として展望するのである。

この社会党の路線は、大衆の自然発生性への全面的な肯定であり、この自然発生性の反革命への敗北の過程は既に確認した。

最後に、70年安保の基本的決着点たる70年佐藤政権へ至る情勢の確認の上に、ゲモノの斗争のメカニズムとその展望を確定し、これをくむべきである。

(14) 米帝国主義のベトナム和平交渉呼びかけを、ベトナム戦争と金戦争の二律背反はベトナム政策の転換→ドル防衛→対日EEC民間長期資本輸出と把握してはならぬ。ドル危機は帝国主義の不平等発展の結果であり、ベトナム反革命の放棄→後進国勢力圏の放棄は、一

革命の現実性の展望を切りぬかなくてはならない。

よして、全軍連一地区反戦は、日本帝国主義のアジ
ア侵略反革命の政策に軍事外交政策と対決する斗い
426反戦ストの中で全口的に展開しなくてはならない
。その中心的対決点は、沖縄基地移付設置による核武
装化への布石、自衛隊の沖縄配備、アジア侵略の前線
基地化であり、オ2はアジア侵略拠点として、
5〜6月ホーリンの測量が予定されている成田空港の
建設を阻止する斗いである。たまたまアジア侵略反革命
一軍事外交政策に「対決する斗いは、その政策を貫徹す
る帝国主義的國家体制の中核であり、かつナショナリ
ズム一反革命の物質的表現たる自衛隊の帝国主義軍隊
化を粉碎する革命的な反戦斗争へ収約しなくてはなら
ない。この革命的な反戦斗争は、自衛隊の帝国主義軍隊
化阻止し全人民の武装と赤軍への戦術形態の発展を通
して、反反革命一反米を賣とする反戦斗争の市場に全
人民的政治斗争にプロレタリアヘゲモニーを貫徹する。
426回反戦ストの中でプロレタリア国際主義の内史
を深化させつつ、428全口総結集の中央一首相官邸襲
撃斗争として、日本帝国主義の國家権力中核との全面
的対決の中で、全軍連一地区反戦にプロレタリア統一
戦線が萌芽として表現すべきプロレタリア独裁権力と
は、この戦術形態の発展（帝国主義軍隊の解体と全人
民の武装と赤軍）である。

全軍連一地区反戦は、426一タ斗争の過程とよの再
度の全口化の過程で、生産臭一街頭を結合した実力斗
争を全口的に展開可能な運動組織として強化され、未
に於ける赤軍一セネストに立脚したソヴェエトにプロ
レタリア独裁権力を獲得するものとならなくてはなら
ない。

我々は、426一タ斗争の闘争を、5月成田空港反
対斗争として全口化し、6月成田空港ホーリン阻止
中央一現地斗争として総結集し、その全口化、7月日
米経済貿易合同委員会紛争斗争で三たび中央結集し、
その戦術の一連の系列を、9月佐野の米阻止斗争でメ
ソに高め、10月安保10年代に於けるプロレタリア独裁
の計画としての戦術の実現をめざすものである。
よして、この番526の全口化、28の回反戦集会へ

向け、全軍連主義者の奮闘、全口地区反戦連合の建
設と軍連一反戦インターの建設をなすものである。

<11>